『アイロンのある風景』レポート

〜死を求めても生を全うしなくてはならないという不条理〜

2-L-05　武田政和

1. 作品のあらすじ

　ある小さな町に住んでいる順子は、二月のある日の夜中に焚き火友達である三宅さんに呼び出され一緒に住んでいる啓介と三宅さんのところへ焚火をしに行く。くみ上げた焚き火用の流木に火を入れるあいだ、順子は一人、彼女が揺さぶられるような矛盾性をはらむジャック・ロンドンの「たき火」について思っていた。三人でウィスキーを回し飲みした後、順子は家を出てきてからのことや三宅さんや、啓介との出会いについて考えていた。その後、啓介は腹痛のため先に帰宅してしまい、順子と三宅さんの二人が残る。二人で焚き火を見る中で、順子はふと三宅さんに家族がいることに気づき、その家族は東灘区に住んでいるという。三宅さんがもうこの話をつづけたくないということでこの話は打ち止めとなったが、その際彼は順子に対して、どんな死に方をするか考えたことがあるか、と聞いた。順子が首を横に振ると、彼は自分が冷蔵庫の中で窒息死するであろうことと、数年前から延々と見続けているもので、ゆっくり死んでいって目が覚めたと思ったら冷蔵庫に引き込まれるという夢の話をした。そして、ジャック・ロンドンが自殺した件に関して彼の予感が本質的に的中しており、予感という身代わりの差し替えは現実よりはるかに生々しいということと、死に方から生き方を導く方法もあるのではないか、と述べた。続いて順子は三宅さんがどのような絵を描いているのかを尋ねたところ、「アイロンのある風景」という絵が最新作であることと、このアイロンが何らかの身代わりであることが説明された。こういったやり取りを行う中で、順子は自分が空っぽであることに気づき、その問題を解消するため自殺を考えるが、焚き火の温かい炎に包まれて深い眠りに落ちる。

1. 描写における特徴

　・語り手が三人称視点で語っている。

　・登場人物のやり取りが、さもお互いの内面に気づいているかのごとく書かれている。

　・焚き火の炎が強くなってくると、順子と三宅さんのやり取りが非現実的なものになっていく。

1. 登場人物について

　・順子…父親との間に確執があり、家を出てきてしまう。

　　　　　家族の温かさを持っていない

　　　　　自分を見失っている

　・三宅さん…神戸に家族をおいて一人でここに住んでいる。

　　　　　　　冷蔵庫に対して恐怖を感じている。

　・啓介…順子や三宅さんに比べて特徴の薄い一般人。

1. 作品の発信したいテーマとそれを導き出した根拠

　私はこの作品が伝えたいテーマは「死を求めても生を全うしなくてはならないという不条理」であると考えた。

　まず、私が注目したのは焚き火の炎の強さだ。p65l10「たき火は落ち着きを見せた」とある。私は、ここから順子と三宅さんが非現実的な世界へと引き込まれていっているように感じた。実際、三宅さんが今回の焚き火において自分のことを語り始めるのはこれ以降である。さらにその後p65l15「腹が痛いと啓介が言い出した」とある。この後啓介は先に帰宅してしまうわけだが、私はこの物語において啓介は一般人、つまりは「たき火」の読書感想文の発表の場でいうその他一般生徒の色合いを出したものだと考えた。ここで啓介が帰宅することが、これ以降の現実感の低さを強めるものになると考えた。

　つづいて、これ以降の二人の様子だ。三宅さんは東灘に家族がいることをこのときになって初めて明かしたほか、自分がどうやって死ぬと予感しているか、それに関してどのような夢を延々と見続けているのか、そして、予感が一種の身代わりとして現実以上に生々しくなるものであると語った。ここで三宅さんが冷蔵庫で窒息死する予感を感じていたのは、冷蔵庫と同じ極寒の地で、たった一人の男が基本的に死を求めているにもかかわらず生きるために最大限の抵抗をしなくてはならないという、「たき火」のストーリーとリンクさせているのは間違いないであろう。ここから、「アイロンのある風景」という絵における、アイロンに関しては、家族がおらず、一人で部屋にいるだけ、一人冷蔵庫で窒息するだけの三宅さんの身代わりととることができるであろう。また、順子はこのような非現実的な三宅さんの話を聞くなかで、自分が空っぽであることに気づいてしまう。私は、順子が「アイロンのある風景」のポツンとあるだけのアイロンに何の温かみもない自分の姿を重ねてしまったと考える。このような二人にとっての焚き火は家族のような温かみを宿す幻想的な存在ではないだろうか。

　そして、私がこのようなテーマだと考えた最大の根拠がp77l12「焚き火が消えたら寒くなっていやでも目は覚める」である。p76において二人はともに自殺することを考えているが、p76l10「焚き火の火が全部消えるまで待て」といったことで、二人は死ぬことができないでいた。そして、「焚き火の火が全部消える」ということは「寒くなっていやでも目は覚める」ということである。つまり、焚き火の火が消えれば二人を包んでいたぬくもりはなくなり、現実世界に引き戻されるということである。以上より私は、村上春樹はこの「アイロンのある風景」において、被災者の皆さんに、どんなことがあっても生きなくてはならない、ということを伝えたかったのではないだろうかと考える。

1. 『短編集〜神の子どもたちはみな踊る〜』作品全体を通した「隔離」・「階層構造」に関する考察

　今回の『アイロンのある風景』の考察では、焚き火を重要な位置付けとして捉えた。前述の通り、焚き火によって幻想的な空間に引き込まれるも、それが消えることによって現実に引き戻される。これはつまり、「焚き火」というのが現実世界と隔離された空間として描かれているということである。現実とそれと隔離した空間を退避させるように描くことによって、現実の事象をより強調して表現しているのではないだろうか。また、この焚き火は物語の「階層構造」も示していると考える。焚き火の中で三宅さんと順子は表層の意識では隠している深層のことについて考えている。これは、非現実的な空間が深い階層の思考を引き出すことを示していると考えられる。

　他の作品においても同様のことが言える。『UFOが釧路に降りる』では隔離された空間である北海道において小村が自分の内面と向き合っている。『神の子どもたちはみな踊る』では善也が野球場で自分の深層と向き合っているし、『タイランド』ではサツキが日本から遠く離れたタイで自分の “石” を消そうとしている。『かえるくん、東京を救う』では片桐とかえるくんが夢の中で地下（深層）のみみずくんと対決している上、『蜂蜜パイ』では小説の中で淳平が深層を映している。 “地震の後に” というコンセプトで描かれた一連の作品は、このように「隔離」と「階層構造」を組み込むことによって、地震で傷ついた人の心を隔離された深層から癒そうとしたのではないだろうか。

　このことを考慮すると、文庫本の冒頭の部分にあった、ドストエフスキーの「悪霊」、とジャン＝リュック・ゴダールの「気狂いピエロ」についても説明がつく。「あったことがあった」というのは「あったこと」を包括する「あったこと」が「隔離」と「階層構造」を示すことができる。「一人一人のことは何もわからないまま、十五人戦死という事実が残るだけ」というのは、戦死された中に含まれる一人一人という階層構造を示しているのは明白であるし、この話をしている男女にとって、戦死者が出ている戦場は隔離された空間である。

　このように“地震の後に” というコンセプトで描かれた一連の作品は、「隔離」と「階層構造」を組み込むことによって、地震で傷ついた人の心を隔離された深層から癒そうとしたのではないだろうか。

参考文献

・村上春樹　『アイロンのある風景』論―身代わりとしての物語―　　　　　平野芳信

・地震の後で、焚火をおこす

　―村上春樹「アイロンのある風景」が映し出すジャック・ロンドン「焚火」

　東洋大学人間科学総合研究所紀要第8号（2008）